



随

想

鳥の略押

仲村 研

わたしは時おり京都近辺の村へ出かけ、そこに蔵される史料を採訪する。わたしは自分の専攻から中世の史料に関心をもっているが、中世文書の署名の部分にとくに興味をもっている。文書の文字、書風は、それを書いた人の個性を表現する。しか

し、日本の中世村落に生活した人々は、大半は文字と縁遠い人たちである。だから借用証文にしても土地の売券、譲状にしても、村に一人か二人の文字を知っている人に文書を代書してもらい、自分の名前の下に自署をするのである。もちろん、教養ある人は自分で文書を作成し自署をする。その場合、教養の高さ、身分の高さを誇らしげに自署に表現するのである。わたしたちはこの自署を書判、花押、押字とか呼んでいるが、名もなき村民の書判は、貴族のそれのような華麗さや武家のそれのような威圧感はなく、たんなる記号にすぎない。かれらはさまざまに描いた。○や×や狐を描いた。筆軸に墨をつけ、それを文書に押すだけで事足りたわけである。だから貴族や武家の書判を花押というのに対して、これを略押と呼んでいる。

わたしは三、四年前から禁裡領丹波国山国庄(府下北桑田郡京北町山国・黒田地方)の研究調査を行なっているが、山国地方各家所蔵の中世史料に無数の略押を見出すことができた。とくに興味をそそったのは、カットに掲げた小畠逸朗氏所蔵、文明元年

(一四六九)十二月二日付下上左近山譲状の略押である。この略押は鳥の名はわからないが、鳥類一般ではなく、おそらくかれらが山国の里で日常親しんでいる鳥に違いない。地下に下り立つ鳥の姿である。筆の動き具合から察するに、日頃握ったことのない筆で実にたどたどしく描かれている。このほか山国の中世文書の略押には象形的に獣を描いたものもあり、これらの略押から、わたしは中世に生きた山国地方の人々の素朴な感情を感じとる。と同時に、自然と直結している中世人民の生活を垣間見るような思いがするのである。

戦国時代の武将には好んで動物を自署にした者が少なくなかった。代表的なのは武田氏の獅子形印判、後北条氏の虎形印判であろう。戦国武将は能率上花押を印判に変えつつあったが、両氏の印判は人民に対する、他の大名に対する権力の誇示以外の何ものでもない。鳥の花押にしても三好政康、宮崎之存、真木島昭光、伊達政宗らの武将が各自の自署としているが、その筆致はスムーズで流動的であり、力強さはあるが、素朴さは感じられない。洗練されすぎ

ているのである。

わたしは略押のなかから中世人民の素朴な感情と生活を見出すことに中世史研究のささやかな喜びと楽しさを感じている。この短文を書き終えるにあたって、つい先頃山国の里で聞いた古老のつぐみとりの話のくだりを思い出した。

(人文科学研究所研究員)

老の限界

吉田 隆章

「本ばかり読んでいないで少しは運動され
てはどう？ 身体に毒ですよ」

と菊の手入れをしながら老妻が書斎の私にいう。「ああ……」と気のない返事をして、そのまま午まで書斎を出なかったが、昼食の箸を取っている私に
「あなた近ごろ顔色が悪いですよ。毎日散歩でもされてわ……」

とまた同じことをくり返している。

「自動車でもやるか。毎日一時間の稽古だ。よい運動になるよ」

「自動車学校へ入ってですか」

「そうさ。少し年をとり過ぎているかなア」

冗談と思ったらしい彼女はしばらく黙って私の顔をみていた。私は今までにこのことを考えてみたことがあったのだから、決して思いつきで口走ったのではなかった。

「駄目かな」

「いいえ、駄目とはいいませんが……でも自転車にも乗れないあなたが……」

二人はまた黙って箸を動かしつつ置いた。硝子戸越しに庭の雁来紅が秋の陽をあざやかに映していた。

四、五日してから私は近くの自動車学校に入学した。ベンチに腰かけて稽古の番を待っているアンチャン風の若者が、私に好奇の眼を向けていたが、

「おちさん、年いくつですわね」

と遠慮のない聞き方をする。

「六十三だよ」

と私は昔流の数え方で答えた。

「へえ、偉いですな。これから自動車習っ

てどこへ行くつもりですか」

「地獄の一丁目へだ」

近くにいた娘たちが一度に黄色い声で笑いきけた。

「わたしとこの父なんか、おちさんよりずっと若いけど、とてもそんな勇気ないわ。尊敬するわ」

と眼のくりくりした小娘がいう。

「あんたもわたしのクラスメートだなア」

「ええ、そうよ、仲よくしましょうね」

私は年甲斐もなく温いものを身内に感じた。

検定日が来た。やはり試験ともなるとはらはらした。私より先に何人かが見事に検定コースを走った。まず外周を三段に増速しながら一周して、内部のSやクラंकを前進したり後退したりする。

私は私の年の半分ほどの若い検定員に「お願いします」と一礼して、初めて検定車に乗った。エンジンの始動よろしく車が走り出した。ローからセカンドへ、つづいてサードへ。このままでコーナを廻ると検定員を横倒しにする……と思った。私

の頭脳がブレーキを命じた。どうしたことか車はますます増速した。危い!!

次の瞬間、車は緑石を越えて畑の中へ跳び込んでいた。こんな暴走は自動車学校開校以来なかったであろう。もちろん失格である。

私は曼珠沙華の美しい田圃道を帰りながら、落第生の卑屈感と羞恥心をもつてしみじみ「老の限界」を思った。ふとロバート・ブラウニングの詩の一句を想い出した。

What I aspired and was not
Comforts me.

その夜、寝ながら貧乏ゆすりの青年と眼の丸い女の子を思い出していた。

(商学部教授・実用英語)

このごろ思うこと

辻本 一郎

その一、オリンピックを終えて

古いことをもちだしてまことに恐縮だが、大東亜戦争で文字通り生死の境を幾度もさまよい、頭、胸、両脚と数々の戦傷歴をもつ私にとって、対立なき世界・闘争なき社会の実現へのねがいは、私の信念であり、言行の源でもある。

私のオリンピックにかけた夢もここにあった。九十四カ国から八千名に及ぶ平和の標語通り、開会式におけるアフリカの新興国始めネパール、モンゴル等アジアで初参加の国々の若人たちが国旗を掲げ胸を張って行進する誇り高き姿、閉会式に締めされた友愛と信頼、一つの世界にとけあった平和の大行進、まさに第十八回大会がオリンピック史上に残る最も光榮ある記録であった。本大会成功のかけにはもちろん主催者の努力が高く評価されねばならないが、各競技を通じてフェアプレーの精神に徹した競技者・役員のマナーが運営を円滑にすることができた。ここにアマチュア・スポーツの純粋性があり、数々のエピソードと共に多くの教訓をわれわれに与えてくれた

いる。

オリンピック東京大会は終ったが、多大の犠牲を払って得た尊い収穫を、中でも「世界は一つ」という魂をゆさぶった感情を、今こそ教育の場に持ち込み、国民思想にまで育成すべきではなからうか、健全な国民を育てるためスポーツの振興をこそ願って止まない。

その二、べからず教育の再登場を

復員後、病父の事業を継ぐために、実業界から教育界へ転じなければならなくなつたとき、私は苦しい生活の中にも平和を求めて止まない人間の教育を——使命観としてこの道に入った。

しかし満十七年を顧みて功罪相半ばする自分であり、今もなお悩み多い凡愚の毎日である、ただ最近になってようやく判ってきたことは、年々子供の素質傾向が変つていくものであるということである。今の生徒は十年前の生徒でも、五年前、三年前の生徒でもないということである、言葉を変えれば親の素質も社会の環境も年々変りつつあるということにもなる。昨秋、厚

生省が三才児の全国一斉検診の結果「三才児の四〇％が精神的・肉体的な問題児である」と実態を明らかにし世間を驚かした。

その当時、奈良女子大学の岡潔先生が「国家の憂慮すべき問題としてこれ以上のものはない」とある会合で講演され、科学者の良心からその原因を解明された。その中で、悪い親が悪い子を生んだのだ、戦後の教育を受けた母親たちが受けた教育に大きな責任があると述べ、更に、戒律を守らず教育が知能の発達段階において人の情緒を安定せしめることができる、と大膽の働きに言及、理論の根拠を明らかにされている。先生は「べからず」教育が絶対必要なのであって、人間が感情の働きにブレーキをかける力は戒律を守らせる教育による他ない、と警世的発言を終わっている。(38・10・時事通信 抄)

終戦前までの「べからず」式教育は全面的に排除され、子供の自主性の開発のために経験学習という名のもとに放任に近い教育がなされて来た過去の欠陥が日に日に芽をふきつつあるのではないか、道徳教育論をたたかわす前に、冷静にこの事実を直視

しなければならぬ。

(昭和十一大法卒・京都商高校長)

富田高助君のこと

末永祥之助

私は、下り「ひかり」号のピュフェで、大きな窓ガラス越しに外を眺めながら、一人でビールを飲んでた。日は暮れていなかったが、空には黒い雲が去来して、富士山は、スソ野しか見れなかった。そして、黒い雲がふえるにつれて、日が暮れていった。私は、黒い暗い外景を、最初のうちは、ボンヤリと眺めていたが、だんだんと、それと対決するような気持ちに変わり、にらむように眺めていた。親しかった友、富田高助君のことを思い出したからである。

富田高助君は、フィリピン作戦で戦死した。上陸前に、船が撃沈されて戦死したのか、詳しいことは知らない。

富田君は、私の小学校当時、二年上級生

だった。お父さんは、富田儀作といい、当時、朝鮮でも指折りの富豪だった。黄海道に金山浦に鉾山を持ち、鎮南浦には、事務所と高麗焼きの陶器の店があった。

富田君は、頭は非常によかったが、不幸にもテンカンという持病があった。そのため中学も中退、私の中学二、三年当時、富田君は、「三和公園」のあった、丘の中腹の小さな離れのような家に住んでいた。「三和公園」は、富田君のお父さんが持っていた、大庭園を鎮南浦府に寄付したものである。細井和喜蔵の「工場」や「女工哀史」を貸してくれて、私の目を多少でも社会へ向けさせてくれたのは富田君である。

二人が親しくなったのは、二人とも、土地のメソヂスト教会に通っていたからである。ともに、日曜学校の教師をしたり、路傍伝道に加わったり、熱心なクリスチャンだった。ところが、それから何年か先、日曜の礼拝のとき、横に腰掛けていた、富田君が、ポツンと「神は、あるのかないのかわからない」と私につぶやくようにいった。間もなく、二人は教会を離れた。

私の同志社大学在学当時、富田君は、一

時、西宮の夙川にあった、兄さん夫婦の家に住んでいたことがある。大阪協同劇団に關係して、舞台監督の助手などもしていた。私は、戦後復員した直後、この夙川の家を訪れたが、戦災で跡かたもなく、兄さん夫婦の消息も知らない。

戦争が激化するとともに、富田君は、鎮南浦へ帰った。男山八幡の神官の娘さんと結婚したというが、その人とも会ったことがない。彼が、昭和十六年の一月に、よこしてくれた手紙が、いまでも手もとに残っている。

「今年の冬は珍しく暖かい。冬暖かいとのんびりした気持ちになるが、余りのんびりし過ぎて読書も出来ない。この地で読書が出来ないことは寂しいことだ。西宮時代、近所に森戸さんがいたので、時々一緒にあったことがあったが、こうした時代、古典をしっかりとやるんですね」と聞かされたの思い出す。しばらく一人の生活が続いた。氷のない大同江を一度見に帰って来ないか」。

(校友・人物群像社社長・文学部講師)

キング牧師とノーベル 平和賞

鎌谷 襄

オリンピック開催中の十月十四日に、一九六四年度のノーベル平和賞が米国のマルチン・ルッター・キング牧師に授与されることが発表された。彼は黒人の人種差別廃止運動の指導者として知られており、キリスト教信仰とガンジーの非暴力抵抗主義の原則に固く立って、想像に絶する激しい迫害にも屈せず、困難な黒人解放運動を勝利へ導いた。そして新公民権法の成立にこぎつけた三十五才の若き指導者であって、平和の金メダルの受賞にふさわしい人であろう。

彼は教会と並行して人種差別反対運動を積極的に進め、このニグロの人間の権威と自由のための闘いはアラバラ州モントゴメリー市の五万にのぼるニグロ市民によって

一九五五年十二月から約一カ年にわたって闘われた市内バスの差別待遇に反対する大衆的バス・ボイコット運動によって頂点に達した。私が彼とその運動に特に関心を抱いている理由は、ちよつうど一九五五年から二年間にわたってオハイオのオベリン大学に学び、この運動を見聞し、身近かに感じるものが出来たからでもある。オベリン大学は米国で最も早く男女ならびに黒人白人の共学制をとり、進歩的思想のみなきっている大学である。当時フリーダム・ライダーズ(バスに差別なく乗る青年の運動)に数多くの黒人、白人の学生が参加すべくアラバマへ向ったことを思い出す。

最近キング牧師の著書「自由への大いなる歩み―非暴力で闘った黒人たち―」
“STRIDE TOWARD FREEDOM, The Montgomery Story.”(岩波新書)をよみ感激を新たにした。彼は「非暴力的抵抗は僕達の戦術となり、愛はこれを規制する理想となっていた。いいかえるならば、キリストは僕達の運動に精神と動機とを与え、ガンジーは方法を与えた」と記している。人種問題は米国の最大の道徳的ディレ

ンマであり、教会はこの激しいチャレンジを受けている。聖書を中心である広大な人種平等の思想は、人種隔離を道徳的に全く弁明の余地なきものにしており、これを征服する仕事は、今日の教会が直面している避けることの出来ない必要なのだということを彼は叫んでいる。

昨年八月、ワシントン市で黒人二十万を結集して行なわれた大行進の先頭に彼の顔をテレビを通して見る事が出来た。私は現在黒人解放のために戦っているオベリン大学時代の友人たちを思い出す。神学部卒業後、南部の教会へ赴いた黒人アーサ、優秀な成績で奨学金を受け、更にエール大学で将来に備えて研究を続けているアラバマ出身の黒人カール、同じく卒業後クリープランドの黒人スラムで青年たちのために献身している白人トム、また当時アラバマで捕えられ投獄され、大学長自ら当地へ急行し無事つれもどされた白人デビッド(彼はその後牧師になる決心をしシカゴ大学で学んでいる)。これらの若き協力者が続いていることを思い、米国における黒人解放運動が健全な発展を遂げることを信じ、またそ

のために祈るものである。

(女子中高教諭・聖書)

山の学校参観記

中井 汲泉

山の学校は生徒が六人なのです。こんな山の中に学校があらうとは誰だっと思いません。人里を離れて四里のあいだ、家一軒見るわけでなし、原始林の中の軌道に沿って、谷地をこえ、藪をこえて来たのですから、もし学校があつたら猿の学校か熊の学校です。ところが、材木を運び出す軌道があるかぎり、営林署の土場があるのです。

教室は材木小屋の一部を仕切つてあつて、入口の板戸が開いていたのですから、つい中にはいつて参観する気になったのです。正面に小さな黒板があるだけで教卓もなければ教壇もありません。さすがに床だけは張つてあつて、ていのよい鶏小屋

というほうが早いかも知れません。右手のやや高いところにガラス一枚はめ込んだ明り窓があります。生徒の机が六脚、教室に似合わない立派なぶ厚い造りなのですが、これは相手が営林署の土場で、木材はいくらでも全くと手のものなんです。今日は木曜日ですが、学校はお休みでした。先生は営林署の駒木さんの奥さんで、三、四年前盛岡の高等女学校を出られた方です。黒板には大きな字で「風」と書いてありました。

ただそれだけです、少し湿っぽい感じがしました。生徒は、りえ・興一・みづの姉弟と、てる・きわの姉妹、ほかに竹という男の子がいます。学年別からいうと五年が一人、三年が二人、二年が一人、一年が二人です。以上は駒木先生のお母さんの説明ですが、先生は四、五日前からご生家に病人が出来て、そのため学校は暫らくお休みとのことでした。

(校友・わびすけ主人)